

日英バイリンガル児童の物語りに見られるトピック導入・維持のパターン

ナラティブ分析を通して

齊 藤 百 恵

1. はじめに

どんな話が聞き手・読み手にとってわかりやすいかを考えると、聞いている・読んでいる人がその時点で何がトピックであるか理解していることが大事だということが考えられる。したがって、話のわかりやすさとトピックがどのように維持されているかということは密接なものと考えられる。Givón (1983) は「トピックが現れる位置、コード化の種類によってトピックの性格が決まり、それが一貫性のあるディスコースを作る鍵」であると述べている。具体的には、最も連続性のないトピック、つまり初めて導入されるトピックは完全な形の名詞句 (full NP) で表され、次にストレス／独立型の代名詞 (stressed/independent pronouns)、つづいて非ストレス／拘束型の代名詞 (unstressed/bound pronouns)、最も連続性のあるトピックはゼロ照応 (zero anaphora) で表されると主張する。Givón によれば、混乱を起こすようなトピック・予想外のトピック・非連続的もしくはプロセスが困難なトピックであればあるほど、トピック導入・維持により多くの情報を追加しなければならないのである。

本研究は、語り（ナラティブ）が理解しやすいかどうかを構成する一要因が適切なトピック維持の運用にあるとの観点に立ち、日英バイリンガルの児童が日本語・英語でそれぞれ物語りを語った場合、どのようにしてトピックを維持するのか分析する。さらに、バイリンガル児童の語りを分析対象とすることで、日英間の言語能力の関連性も検証する。

2. 調査項目

本研究を通して以下の二つの疑問に答える。第1の疑問は、日英バイリンガル児童が日本語、英語それぞれの言語で物語りを語る時、どのように対象物を指示し、維持運用するかである。具体的には、イヌ、カエル、ハチ、モグラ、シカなども含めて語りに登場する動物（人ではないが、以下「登場人物」と呼ぶことにする）が主語の位置にある場合、それが（1）完全な形の名詞句であるのか、（2）代名詞なのか、それとも（3）省略という形をとるのかを観察する。さらに、その登場人物が（1）初めて言及されるのか、（2）2度目もしくはそれ以降の言及なのか、（3）いったん、他の登場人物が主語の位置に立った後、再び登場した場合なのか、（4）連続して言及されている場合なのか、を調査する。これらの結果から、日本語と英語の語りでトピック導入・維持に関して普遍的なスタイルがあるのか、あるとすれば、それが何なのか、またそれぞれの言語に固有で独特なスタイルがあるかどうかを検証する。第2の疑問は、聞き手・読み手が理解しやすいわかりやすい話にはどのようなトピック維持のパターンが見られるかである。これは、トピック導入・維持に関して、特定のパターンに沿った語りが理解しやすいのではないかという仮説に基づく。

3. 調査方法・被験者

本研究では、絵本を見て物語を語るという小さな子どもにも可能なタスクを通して収集した発話行為のデータを分析する。これはNakamura (1993) やNakahama (2002) でも採用された手法である。本研究で使用するデータはMinami (2002, 2003, 2005) で収集・使用され、すでにデータベース化されている。被験者は6歳から12歳までのサンフランシスコ及びサンフランシスコ近郊に在住する日英バイリンガルの児童40人である。ナラティヴ（語り）収集の方法としては、24ページから構成される文字のない絵本、“Frog, Where Are You?” (Mayer 1969) を一度概観した後、日本語と英語とでそれぞれ物語を語るというタスクを採用した。ナラティヴはテープに録音後、書き起こしたものである。絵本の主要な登場人物は、男の子とペットのイヌ、男の子が飼うカエルである。飼っ

ていたカエルがある日逃げ出してしまうところから物語が始まる。男の子とイヌと一緒にカエルの行方を捜すのが絵本の主な流れとなっていて、その捜索の途中さまざまなアクシデントに遭遇しながら、最後にペットのカエルとその家族を無事捜し出す。途中、ハチ、モグラ、シカなど様々な周辺人物も登場する。

さらに、子どもによって語られたナラティヴの客観的評価、つまりナラティヴが「わかりやすい話」かどうか判断するため、日本語・英語の各母語話者に語られた話を評価してもらった。評価に当たったのは、日本在住の日本語母語話者で大学生以上の男女各8名、及びアメリカ・カリフォルニア在住の英語母語話者で大学生以上の男女各8名の合計32名である。評価の方法としては、書き起こされたナラティヴの中から無作為に選び出された10個のナラティヴを評価者に読んでもらい、10段階評価で点数をつけてもらった。

4. データの分析

4.1 分析方法

テープに録音された被験者のナラティヴはCHILDES [Child Language Data Exchange System] (MacWhinney & Snow1990) プロジェクトの言語解析プログラムとして開発されたCLAN [Computerized Language Analysis]を使用できるようにデータ・ベース化されている (Minami 2002, 2003, 2005)。CLANでデータを分析することにより、ナラティヴの発話数の算出が可能になる。なお本研究では主語の位置に立つ指示対象に注目するため、このデータを基に導入された指示対象の形態、導入の順序、指示対象に付属した助詞や冠詞等のマーキングもそれぞれにコードを付け、ある形態の総出現数や導入の順序、マーキングが見られるようにした。

4.2 コーディング

分析に当たっては、以下のように3つのレベルでのコーディングを定めた (表1)。

表1 コーディングの詳細

1. 指示対象の形態	コード
完全な形の名詞句	Full Noun Phrase
代名詞句	Reduced Noun Phrase
省略	Null Noun Phrase

2. 指示対象の導入順序	コード
初めての導入	First Mention
二度目	Second Mention
継続	Continuous Mention
再登場	Re-introduction

	3. 指示対象のマーキング (主語に伴う助詞／冠詞)	コード
日本語	「名詞句＋が」	ga
	「名詞句＋は」	wa
	助詞の脱落または「は」「が」の助詞以外の使用	Others
英語	indefinite article “a/an”＋名詞句	Indefinite Article
	definite article “the”, demonstratives/possessives (ex. that/his)＋名詞句	Definite Article
	定冠詞・不定冠詞の脱落または固有名詞や不加算名詞	Others

4.3 コーディングの例

以下にナラティヴの一部分にコーディングをした例を示す。() 内の数字は見ている絵本のページ(場面)を表す。まず日本語のナラティヴの例を示す。この例は、最初の文で「男の子とイヌ」が完全な形の名詞句に助詞「が」を伴った形で初めて話に導入されていることを示す。また、同文中に「カエル」が初めて導入されているが、主語の位置ではなく目的語の位置に現れておりコーディングの対象外とするが、後続する際の導入の順序に反映させるため注釈書きをしてある。さらに、2番目

の文では、導入された「男の子と犬」が引き続き主語になっているが、それが省略されており、次に「カエル」が新たに主語の位置に立っている。助詞「が」を伴った完全な形の名詞句であり、導入の順序としては目的語として導入された後、「男の子と犬」が主語になっているため、「再登場」ということになる。

日本語のナラティブの例

Kenji [boy; 12 years, 6 months] (Pictures 1-2)

ある日 男の子と犬が カエルを 見つけました。

Boy & Dog: Full Noun Phrase: First Mention: Use of the Subject Marker ga [kaeru introduced in the object position]

ある日 寝ている間に カエルが 逃げました。

Boy & Dog: Null Noun Phrase [主語の省略]: Second Mention

Frog: Full Noun Phrase: Re-introduction: Use of the Subject Marker ga

次に英語のナラティブの例を示す。最初の文中で男の子が不定冠詞を伴った完全な形の名詞句 “a little boy” で登場している。そして、その直後も省略の形で男の子が主語として保持されている。また、日本語の例にも見られたように、カエルが目的語の位置で登場しているので注釈が入れてある。最初の導入では “a little boy” であったが、2 番目の文では代名詞 “he” となって現れている。次に、主語がカエルに取って代わり、定冠詞を伴った名詞句 “the frog” が「再登場」している。

英語のナラティブの例

Asami [girl; age 7 years, 8 month] (Picture 1-2)

There is a little boy in his room and [Ø] looking at his frog.

Boy: Full Noun Phrase: First Mention: Indefinite Article

Boy: Null Noun Phrase [主語の省略]: Second Mention [Frog introduced in the object position]

Then he takes nap and the frog sneaks away from his cage.

Boy: Pronoun: Continuous Mention

Frog: Full Noun Phrase: Re-introduction: Definite Article

5. 結果

5.1 日本語と英語のナラティブに見られるトピック導入・維持方法の相関性

登場人物が、トピックとしてどのように導入・維持されたかを調査した結果、以下の項目について相関性が認められた。

登場人物が初めて物語に「導入」される際、日本語のナラティブ中に見られる「名詞句＋が」の使用回数と、英語のナラティブ中の「不定冠詞＋名詞句」の使用回数の間に統計的に有意な正の相関が認められた ($r(38)=0.45, p<0.01$)。また、登場人物が「継続」して主語の位置に現れた際、日本語のナラティブ中に見られる省略数と、英語のナラティブ中の代名詞句の数の間にも相関性が認められた ($r(38)=0.75, p<0.01$) (表2)。

表2 日・英両語のナラティブに見られるトピック導入・継続の相関関係

	日本語	
	「導入」 名詞句＋が	「継続」 省略
英語		
「導入」		
不定冠詞＋名詞句	0.45*←	0.57*
「継続」		
代名詞句	0.53*	0.75*←
* $p < 0.01$		

つまり、ある指示対象が初めて導入される時に使われる形式が日本語の場合「名詞句＋が」で、それに対応するものが英語の場合「不定冠詞＋名詞句」であり、継続してトピックが維持される時の形式が日本語の場合は省略、英語が代名詞句だと言えることができる (表3)。

表3 日本語・英語のナラティブに見られる導入順序に対応するコード化の種類

	日本語	英語
「導入」	名詞句 + が	不定冠詞 + 名詞句
「継続」	省略	代名詞句

5.2 日本語のナラティブと母語話者による評価について

次に、母語話者がナラティブを読んで評価した点数と、登場人物がどのように導入・継続・維持されたかについて調査を行った結果、以下の項目について相関性が見られた。

登場人物が初めて物語に「導入」される時、指示対象の形態『名詞句 + 助詞「が」』の使用回数が増えると母語話者による評価が高くなった ($r(38)=0.34, p < 0.05$)。また、トピックが3度目以降に主語の位置に現れる「継続」の場合、トピックが省略される回数が増えると母語話者による評価が高くなった ($r(38)=0.36, p < 0.05$) (表4)。つまり、上記のような登場人物の導入・指示対象の継続を使用した児童のナラティブはよりわかりやすい話だったと言える。

表4 日本語のナラティブにおける母語話者の評価結果と各導入順序における形態の相関関係

	日本語			
	「導入」 名詞句 + が	「二度目」 名詞句 + は	「継続」 省略	「再登場」 名詞句 + は
評価	0.34* ←	-0.14	0.36* ←	0.04
* $p < 0.05$				

5.3 英語のナラティブと母語話者による評価について

英語のナラティブについては「継続」の場合、トピックが省略される回数が増えると母語話者による評価が高くなる相関性が認められた ($r(38)=0.39, p < 0.05$)。英語では、統語の制約として原則的に主語が省略できない。それゆえ、今回、分析したデータでは“and”等の接続詞によって文や節を同じ主語でつなぐ際に省略されたと見られる。接続詞を使用して、主語を同一にした文章・発話が多ければ多いほど、母語話者の評

価が高くなったと考えられる。

5.4 年齢・学年、発話数、二言語間の言語能力、主語の省略数の関連性

以下についての調査を行った結果、それぞれの項目で相関性が見られた。

(1) 加齢、学年の増加と児童のナラティブに対する母語話者の評価の関係

加齢、学年の増加によって児童のナラティブに対する母語話者の評価が高くなった（表5）。この結果から、年齢や学年が子供の語りの能力の伸びに関わる要因であることが考えられる。さらに、日英両語で同様な結果が得られたということは、バイリンガルの児童の語りの能力が一方の言語だけでなく、両言語において成長と伴に伸びていることが言える。

表5 母語話者による評価と年齢・学年の相関関係

日本語			
	評価	学年	
年齢	0.45**←	0.97****	
学年	0.43**←		
* $p < 0.05$	** $p < 0.01$	*** $p < 0.001$	**** $p < 0.0001$
英語			
	評価	学年	
年齢	0.45**←	0.97****	
学年	0.54***←		
* $p < 0.05$	** $p < 0.01$	*** $p < 0.001$	**** $p < 0.0001$

(2) 日本語・英語間の発話数の関係

日本語と英語の発話数について調査した結果、日本語、英語のどちらかで発話数の多い児童はもう一方の言語でもその傾向があった〔表6中の(2)〕。このことは、一方の言語能力がもう一方の言語能力に関わりを持つことの一証拠と言える。

表6 日本語、英語間の発話数／評価の関係

	日本語	
	発話数	評価
英語		
発話数	0.73**←(2)	0.31*←(4)
評価	0.36*←(4)	0.30 [†] ←(3)
[†] p<0.06 *p<0.05 **p<0.01		

(3) 日本語・英語間の母語話者の評価の関係

日本語・英語間の母語話者による評価の関係について調査した結果、日本語、英語のどちらかのナラティブに対する母語話者の評価が高い児童はもう一方でもその傾向があった[表6中の(3)]。つまりバイリンガルの児童の語りの熟達には二言語間に相関関係が認められるということが言える。

(4) 発話数と母語話者の評価の関係

発話数と母語話者による評価の関係について調査した結果、発話数の多いナラティブに対する母語話者の評価が高くなった[表6中の(4)]。したがって、多くを語った児童のナラティブがよりわかりやすくなったことになる。

(5) 日本語のナラティブの発話数と主語の省略数の関係

日本語のナラティブの発話数と主語の省略数について調査した結果、発話数の増加に伴い主語の省略数も増加していることがわかった(表7)。つまり、ナラティブ中で同じトピックが「省略」の形で維持されていることが考えられる。

表7 日本語のナラティブの発話数と主語の省略数の関係

日本語	
主語の省略数	
発話数	0.69**
**p<0.01	

6. 最後に

バイリンガル児童のナラティブ分析結果、日本語の場合トピックが初めて話しに紹介される場合「名詞句+が」が、継続して主語の位置に現れる場合「省略」の形式で表され、英語の場合それぞれ「不定冠詞+名詞句」、「代名詞句」という形式によってトピックを維持しようとする傾向が見られた。さらに、日本語においては発話が長くなるほどトピックを「省略」することによって保持していることもわかった。児童が意識的に、もしくは無意識のうちにそれぞれの言語で場面に適した形を選択していることが示唆される。また、日本語のナラティブにおいては上記の言語形式に沿ったものについてはナラティブが理解しやすいと判断されることも認められた。以上のように、言語に固有な機能が認められた一方、日本語と英語に共通して認められた機能もあった。さらに、異なる言語を話す時バイリンガル児童は、異なる形式によってトピックを保持しようとするのがわかった。つまり、ナラティブにおけるトピック維持の機能に関して、言語の同異に関わらず共通して見られる認知的制約が存在することがこの研究結果により示唆される。また同時に、バイリンガル児童は語りの中の登場人物を指示する際、言語に固有な機能を理解した上で、適切なストラテジーを使用しているものと見られる。以上の研究結果から、日英バイリンガル児童の語りに見られるそれぞれの言語に固有、または共通のトピック維持のパターン、さらに聞き手、読み手にとって理解しやすい話しに見られるトピック維持のパターンが明らかになった。しかし、必ずしもそのパターンに沿えばわかりやすい話になるということとは言えず、理解しやすい話の要因にはトピック維持運用の他にも考えられるなど課題が残されている。

参考文献

- 中浜優子 2003 「第二言語としての日本語の物語発話における指示対象の導入・トピック維持の発達パターン」『言語学と日本語教育III』くろしお出版
- 南 雅彦 2001 「ナラティブにおける普遍性と文化的固有性—個人的経験物語における視点と心理的枠組み—」『言語学と日本語教育II』161-180. くろしお出版

- Chaudron, Craig and Kate Parker. 1990. Discourse markedness and structural markedness: the acquisition of English noun phrases. *Studies in Second Language Acquisition* 12 (1). 43-64.
- Cummins, Jim. 1991. Language development and academic learning. *Language, culture, and cognition*, ed. by L. M. Malavé & G. Duquette, 161-175. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Givón, Talmy. (ed.) 1983. *Topic continuity in discourse: Quantitative cross-language studies*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ladies, Jach R. and Koch, G.G. 1977. The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics* 33.159-174.
- MacWhinney, Brian, & Snow, C.E. 1990. The Child language Data Exchange System: *Child language*, 12, 271-96
- . 1990. The Child language Data Exchange System: an update. *Child language*, 17, 457-72
- Mayer, Mercer. 1969. *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- Minami, Masahiko. 2002. The language continuum: Narrative discourse skills in English-Japanese bilingual children. Paper presented at the *2002 Joint Conference of the IX International Congress for the Study of Child Language (IASCL) and the Symposium on Research in Child Language Disorders (SRCLD)*, Madison, WI.
- . 2003. Holding on to a native tongue: Retaining bilingualism for school-age children of Japanese heritage. *International Journal of Educational Policy, Research, and Practice*, 4(2), 39-61.
- . 2005. Keeping Japanese alive: Narrative discourse skills in English-Japanese bilingual children. In M. Minami, H. Kobayashi, M. Nakayama, & H. Sirai (Eds.), *Studies in Language Sciences* (4) (pp. 149-164). Tokyo: Kurosio Publishers.
- Nakahama, Yuko. 2002. Developmental Patterns in Referential Topic Management in L2 Japanese Oral Narratives. Paper presented at *Third International Conference in Practical Linguistics of Japanese*. San Francisco State University.
- Nakamura, Kei. 1993. Referential Structure in Japanese Children's

Narratives: The Acquisition of *wa* and *ga*. *Japanese and Korean linguistics, Vol. III*, ed. by Soonja Choi, 84-99. Stanford: CSLI, Stanford University.

用語リスト

ナラティブ：会話などの双方向の発話に対し、ある事柄について時間的・空間的連続体としてその流れに沿って再現する一連の発話のこと。

謝辞

糸井通浩教授には龍谷大学在学中、指導教授として懇切丁寧にご指導いただいたばかりでなく、卒業後にも日本語教師を目指す私に折にふれご指導、ご鞭撻いただき、ここに深く感謝申し上げます。また、サンフランシスコ州立大学の南雅彦教授には本研究に当たってデータの使用許可、分析、研究の助言をいただきました。本論文は2006年4月にサンフランシスコで行われた58th Annual Meeting of the Association of Asian Studiesでの共同研究発表をもとに、大幅に加筆して作成しました。ご助言いただいた南教授に深く謝意を表します。最後に、本プロジェクトは、サンフランシスコ州立大学から南教授に対して授与されたAffirmative Action Faculty Development Program AwardならびにSupport of Research, Scholarship, and Creative Activityの一貫であることを断っておきます。

(スタンフォード大学非常勤講師)